

仕事楽しい人 F i l e . 6 7 : 松尾雄太さん (プロボクサー)



◆練習はやめたいと思うが、ボクシングをやめたいと思っただことがない

第67番目の仕事楽しい人は、プロボクサーの松尾雄太さんです。

私は松尾さんの取材で、はじめてボクシングジムの中に入ったのですが、サンドバックやミット打ちをしている選手から発せられるパンチの音のすさまじさに圧倒され、こんなパンチをまともに食らったらとの思いが浮かび、身の毛がよだってしまいました。この何とも言えない緊張感の中で、「松尾さんの取材で伺った平堀と申しますが」と、トレーナーらしき方に声をかけると、彼は、私にニコッと会釈して、松尾さんと呼び出してくれました。

人懐っこい笑顔で礼儀正しい挨拶をしながら現れた松尾さん。体は、当然と言えばそうなのですが、均整の取れた筋肉体系。日本フライ級の1位にランキングされるだけある、トップアスリートの筋肉をまとっています。

松尾さんの練習風景を1時間半ほど見たのですが、3分→30秒→3分→30秒という時間経過毎にゴングがなり、これに合わせた、3分ミット打ち、30秒インターバル、3分ミット打ち、30秒インターバルの繰り返しが、印象に残りました。ボクシングは1ラウンド3分間で戦うので、この時間感覚を体に染み込ませているのでしょう。ミット打ちもリズムカルです。トレーナーが両手にはめているミットにパンチを繰り出すのですが、トレーナーが出したミットの位置に、小気味良いテンポで、パンパンパンパンと鋭くパンチを当てていきます。

この練習を見て私は、ボクシングにはリズム感が必要なのだと気づきました。
そして、ヘビー級の元チャンピオン、今は亡きモハメド・アリが残した名文句、
「蝶のように舞い蜂のように刺す」
を思い出しました。

ところで、松尾さんがボクシングをやると決めたのは、小学5年生の時。
いとこの家に遊びに行き、ここで漫画の「はじめの一步」を読んだことがきっかけとなりました。
通っていた小学校や中学校には、ボクシング部がなかったため始められなかったもの、ボクサーになりたいとの思いは失われずに、ボクシング部のある高校を選びました。
この高校のボクシング部の歴代の先輩に、フライ級の元世界チャンピオンのレパード玉熊さんが名を連ねています。（青森県出身ボクサーとしては初の世界チャンピオン）
進学した大学の先輩にも、2012年に開催されたロンドンオリンピックのミドル級の金メダリストの村田諒太さんがいます。
です、部活の練習は、高校、大学ともに、相当にきつく辛かったのですが、
松尾さんは、これまで、練習をやめたいと思うことはあっても、ボクシングをやめたいと思ったことは一度もないのだそうです。
深い言葉が飛び出しました。

“練習はやめたいと思うが、ボクシングをやめたいと思ったことがない”

何故か？

松尾さんにとっての理由は明確です。

それは、
「ボクシングの世界チャンピオンになると決めたから」
自分でこう決めたことを何があってもやり抜くのは当たり前だと、松尾さんは、何のためらいもなく言うのです。
自分で決めたにも関わらず簡単にやめてしまう私の様な凡人に取って、松尾さんからのこの一言は衝撃でした。
そして、何とも言えない、清々しさを覚えました。

「自分で決めたことをやり抜く」
この決めたこととやり抜くの間には、何もない。
ただただ、実行あるのみ。
この単純ではありますが、物事の芯を捉えた松尾さんの発言に触れて私は、心がパッと楽になりました。

◆松尾さんが大切にしているキーワード

マイペース

何事も自分で決めた方が楽しい。

人に決められた道ではなくて、自分で決めた道を、自分のペースで突き進む。

◆松尾さんのパワー○○○

行ったことない所へ行くこと。

国内外問わず、一度も足を踏み入れていない場所に行くと、気分が高まります。

◆松尾さんのコツコツ

ボクシング

飽きっぽくて何も続けられない性分なのですが、ボクシングだけは続いています。

◆条件が整うのを待っていたのでは、結局、何も出来ない

現役のプロボクサーの松尾さんに私が最も聞きたかった質問、

「試合中に飛び交うセコンドからの指示や観客からの声援は、聞こえるのか？」

をしてみました。

松尾さんから、

「平堀さん、対戦相手の動きに集中しているので、言葉は全く耳に入りません」

との答えが返ってきました。

一発で勝負が決まる格闘技なのですから、聞くまでもない当然の解答で、頓珍漢な質問をしてしまったと

私が少々うつむき加減になっていると、松尾さんは、

「言葉はわかりませんが、応援の声（音）は、ピンピンに伝わってきますし、本当に嬉しいんです。ボクシングをしている醍醐味が、まさにここにあると言ってもいいかもしれませんね。」

と補足してくれました。

サッカーでは、サポーターが1 2 番目の選手と言われている通り、観客からの応援は、戦う選手に大いなる力を与えるのでしょう。

応援の力について話し始めた松尾さんは、

「プロボクサーになって、よかったのは、色んな人と出会えることなんですよ」

と続けます。

「普通の仕事をしているのでは出会えない人と話ができる。そして、その後は、私の応援団の一員に加わってくれます。こういう人とのつながりが広がるのが、この上なく嬉しいんです。」

というような話をしながら松尾さんが、

「平堀さん、ツーショット写真を撮らせてもらってもいいですか。平堀さんに取材いただいていることを、自分のブログに乗せたいので」

と言って、スマホを取り出しました。

松尾さんとのこのようなやり取りを通じて、私は、松尾さんがボクシングをする理由が、本の少しだけわかった気がしました。

松尾さんは、

「ボクシングを楽しいと思ったことは、ほとんどありません」

「理想とするボクサーですか。ん～、いませんね」

というように、原稿のネタになるようなエピソードを、なかなか示してくれないのですが、自分が心の底から楽しいと思える人生を歩んできたという自負は、伝わってくるのです。

トレーナーに、あれこれ指示されるのが嫌いな松尾さん。

どうしなければならないか。

その方策を導き出し実行するのは、自分だと考えるから。

こういう生き方をした方が楽しいと、松尾さんは言うのです。

世界チャンピオンになるには、ガードでディフェンスするのではなく、打たれないディフェンスを身に付ける必要があると気づけば、その練習の最適地に飛ぶ。

思い立ったが吉日。

ラスベガス、フィリピンへ、武者修行に行ってきたそうです。

空港に迎えに来た知人に

「英語はできるのか」と聞かれて、

「全くできない」と答え、少々呆れられたが、そんなのにはお構いなしの松尾さん。

「条件が整うのを待っていたのでは、結局、何も出来ないのでからね」

と、意に介しません。

松尾さんの生き方は、

「自分で決めたことをやり抜く」

で、首尾一貫しています。

松尾さんにとっての「世界チャンピオンになる」は、目標ではなくて手段なのかもしれません。

目標は、あくまでも、

「自分で決めたことをやり抜く」

人生を全うすることなのではと、私は、感じ取れました。

そして、松尾さんが、世界チャンピオンになった後、どんな人生を歩むのか追ってみたくまりました。

松尾さんが求める応援。

すなわち、具体的な指示とかではなく雰囲気盛り上げる歓声を、私も松尾さんに贈ってみたいとなりました。

◆松尾さんのプロフィール

職業：プロボクサー

所属：国際ボクシングジム

◆ボクサーとは？

(13歳からのハローワーク公式サイトから抜粋しました：格闘家・武道家)

一口に格闘技といっても、国や民族によってスタイルはさまざま。日本の伝統的なものだけでも柔道、空手、剣道、合気道、古武道のほか数え切れないほどある。さらに、ロシアのサンボやタイのムエタイ、韓国のテコンドーなど。ボクシングやレスリングもその範疇だ。職業としての形もさまざまで、道場を開いて広く弟子をつのる者、ファイターとして観客の前に立ち、ファイトマネーで生きる者、実業団に所属する者、また、師範となり各国、各地に伝導に赴く者もいる。多くの格闘技は国家間、民族間の戦いのなかで護身、勝利のために生まれたものだが、日本の武道は勝負のみにこだわらず、人間形成の手段として長く国民に愛されてきた。その高い精神性が共感を呼び、世界各地で、大人から子供まで入門を希望する人も少なくない。現在、さまざまな格闘技、武道が日本国内で学べる。まずは興味のある道場の門を叩くことだ。強くなりたいからでもいいし、護身術のためでもいい。格闘技・武道を学ぶなかで、将来像が描けるようになる。職業としたいなら、入門は若ければ若いほうがいい。

◆プロボクサーに求められる能力

自分で決める力：やりたいと感じたことに素直に向き合い、実行する決意をする力

マイペース：他者の助言に頼らず、自分が決めたことを自分の意思でやり遂げる力

好奇心：未知の人や国、地域、分野に興味を持ち、踏み込む力

冷静さ：試合で勝つための方法を沈着冷静に分析し、対策を練る力

リズム感：蝶のように舞い蜂のように刺す力